

～最後の女帝。国母とも賞される、後桜町天皇の生涯～

第一章：皇女としての暮らし（備考：年齢はその年の満年齢に統一しています）

皆さん、女性天皇ってどのようなイメージをお持ちでしょうか？
何となく卑弥呼みたいなイメージでしょうか？

でも、そんな古い事ではなく、江戸時代の末期に最後の女性天皇として知られる「後桜町天皇」がおられました。

あまり知られていませんが女性天皇・上皇として大変苦勞して皇室を盛り上げた偉大な天皇なのです。では、女性ミカドの人生を振りかえってみましょう。

「後桜町天皇」幼名を以茶宮(いさのみや)、後に緋宮(あけのみや)いみは智子(としこ)といいます。では、ここからはあけの宮として、話を進めます。

あけの宮が生まれたのは西暦1740年(元文5年)8月、今から280年ほどの昔。桜町天皇の第二皇女として産声をあげます。正室である母二条舎子(いえこ)は藤原氏のひとつ皇室を補佐する名家、二条家の出身。まさにお姫様としての人生が始まったのです。

そして、大きな病もなく、すくすくと育ったあけの宮。父ミカドも若く、正に新たな御代の始まりにふさわしい若々しい時代を迎えます。

1745年(延享2年) あけの宮5歳。

皇室は、母の違う弟の遐仁(とおひと)親王を養子に迎え皇太子とします。1歳年下の異母弟がお世つぎとなり、お姫様あけの宮も「皇太子(ひつぎのみこ)」をたいそう可愛がります。そうして、その後の運命を知るよしもなく宮中には平穏な日々が続きます。

この時、父ミカド桜町天皇は即位から10年目の25歳、和歌に優れ、関白らとのまつりごとにも熱心に取り組む優れた天皇でありました。

東山天皇からの懸案である様々な古い祭りごとの復興にも取り組んでいた様子が記録にあり、まさに働き盛り、御世つぎも決まり皇室は順風満帆でありました。

時の将軍は徳川吉宗。関白は一条兼香(かねよし)。このどちらにも力があり皇室には大きな支えとなった様です。

それでは桜町天皇の読んだ和歌を聞いて、その人となりを感じてみて下さい。

思ふには まかせぬ世にも いかでかは なべての民の 心やすめん

現代語訳(思うようにはならない世の中であっても、どうにかして全ての民の心を安らかにさせてやりたいものだ)

当時の天皇はほとんど京都御所の外に出る機会もなく、庶民の暮らしを見る事ありませんでした。それでもミカドは人々の幸せを願い、祈りつづけていた事が感じられます。

こういった和歌は御製(ぎょせい)といい、天皇が読む和歌として特別に残されています。参考までに本年の歌会はじめての上皇陛下の御製も紹介しておきます。新聞に載りましたね。

贈られし ひまはりの種は生えそらい 葉を広げゆく 初夏の光に

300年近くたっても同じように民を思う和歌を詠み続ける天皇とは本当にありがたい存在です

1747年(延享4年) あけの宮7歳、とうひと親王6歳。

とうひと親王が「ひつぎのみこ(皇太子)」となってからわずか2年。桜町天皇は幼い皇太子に天皇の位をゆずる、譲位をなさります。

こういった譲位は、隠居するのではなく、上皇と天皇が先々強い指導力を持つようとする意志の表れでもありました。しかし、この譲位は、直前に譲位し大御所となった徳川吉宗に敬意を払い自身も譲位し上皇となったとの説が有力です。吉宗は大いに儀式の復興に協力してくれたのです。

系図を参照して頂きたいのですが、弟(おとうと)宮である皇太子茶地宮(さちのみや)が即位し「桃園天皇」となられました。しかし、わずか6歳でどれほどの事が理解できたのでしょうか。不思議な感じがします。

この当時から上皇陛下まで、皇太子は天皇になるべく、おひとりで特別な教育をうけられていました。姉、弟といえども、普通の家庭の様な一家団欒があったわけではありません。

でも、おさなごどうし、折に触れ、お遊びになったことはあったはずです。

姉として、子供なのにもうミカドと呼ばれるようになった弟宮にどんな思いを抱いたのでしょうか？ 誇らしい気持ちだったことは間違いありませんね。

そして、即位後、元号が延享から寛延に改められます。

1750年(寛延3年) あけの宮10歳、桃園天皇9歳。

活発な女の子というと不謹慎ですが、あけの宮は好奇心旺盛な性格だったようで、こんなエピソードが残っています。

宮中でのお正月恒例行事、白馬節会(あおうまのせちえ)。紫宸殿(ししんでん)におわしたミカドの前で馬を披露する行事ですが、その馬たちが気になって、こっそり御殿をぬけだして馬小屋まで覗きに行ったりしています。かわいらしいですね。

しかし、この年から、あけの宮の波乱万丈の人生の幕が開けます。

悲しい出来事です。父ミカド桜町上皇が30歳という若さで突然病に倒れ、崩御してしまうのです。

幼い皇女あけの宮の悲しみは、いかほどだったのでしょうか？、

しかしあけの宮、普通のお姫様ではなかったようで、なんと、十歳にして、その後の法要を主宰するなど、とんでもないリーダーシップをこの時に発揮します。まわりの側近たちにも物おじしない性格がこの事例で感じられますし、当時の葬儀は天皇も仏式です、ならば、かなりの仏教の作法を知っていなければ、主宰などできなかつたはず。相当早熟な才女という印象です。

そして、即位から3年、9歳と、まだ幼いまま上皇という後ろ盾を失ってしまった、とうひと天皇「桃園天皇」ですが、当時の関白が若い公家たちを教育係とし、学問に打ち込ませていく事となります。

桜町天皇の崩御の翌年、1751年(寛延4年)には徳川吉宗の逝去もあり、年末に元号が宝暦と改められます。

明治以前はこういった代替わりや、暦の替り目に元号が替りました。元号が変わるときには何か事件がある事が多いですね。

そしてあけの宮も、伊勢物語など古典や和歌の勉強に励みます。特に和歌は、当代一流の皇族に教えを乞い、めきめきとその才能を開花させていきます。

1752年(宝暦2年) あけの宮12歳

そういった性格を周囲が認めたのか、当時、皇女としては異例の内親王宣下を早々に受け十二歳で成人の儀、そして特別に御殿まで新築されます。

第二皇女でもあり、当時は仏門に入り寺の門跡を継ぐ事が普通でした。他の男性皇族でも年が下があれば同じですし、相当の才覚が無いと皇女として、当時このような事は有り得ないそうです。

活発な性格だったあけのみや、こんなエピソードもあります。

本当はダメな事なのですが、元号を何にするか関白ら重鎮が話し合っている会議を覗きに行き、「するするとすみ、いくひさしくと、めでたし、めでたし」と日記に書き残されています。才覚とともに、大らかで明るい性格がうかがえますね。

そして、弟、桃園天皇も、若手の公家側近や先生となる皇族に恵まれ、父ミカド譲りの学問好きを開花させ、名君へと成長していきます。他にも、蹴鞠が得意で、後鳥羽上皇以来の腕前との側近の日記が残っているそうです。

しかし、長ずるに従い、この学問好きが高じて若き天皇は大きな事件に巻き込まれてゆきます。

この事件は、日本史の中でも軽んじられています。後の光格天皇よりの誓願である、学習院の元となる、公家の学問所設立への胎動ともいえる重要な事件でありました。

「宝暦事件」100年後を予感させる尊王思想(崎門学^{きもんがく})弾圧事

1756年(宝暦6年) あけの宮16歳 桃園天皇15歳

君臣の忠義を明確にする山崎闇斎(あんさい)という儒学者の尊王思想を学んだ、孫弟子ともいえる「竹内式部(たけのうちしきべ)」という学者が、天皇の側近であった若い公家たちに神書・儒書を講じ、絶大な人気を博します。この場合の君への忠義の対象は天皇であり、尊王攘夷の元となる思想です。江戸幕府はこの動きに神経をとがらせていました。実際、公家衆が武術の訓練を初めたりして尊王思想が大盛り上がりします。

江戸時代には時々、この様に学問好きの天皇が現れます、江戸初期の後光明天皇は儒学や剣術を好み、まるでサムライの様に当時の仏教全盛の皇室の学問を嫌ったそうです。

そしてついには、この竹内式部が、学問好きである桃園天皇に直接講義を講ずる事態にまで発展します。天皇が直接、市井の学者の講義を聴くなどとは前代未聞ですし、天皇みずからが、たつての希望として講師を呼んでいるのですから、事態は深刻です。

そして、朝廷の長老たちが動きます。

急進勢力の台頭に危機感を抱いた関白一条道香(みちか)と摂関家(天皇の最側近)は、この騒ぎに関わった若い下級の公家たち数十人を洛中から追放し、幕府に申し立てて、講師の竹内式部を蟄居処払いとしてしまいます。こののち、竹内式部は不遇のうちに旅先で亡くなります。

この宝暦6年の事件、怒った若き天皇は、関白ら重鎮と幕府の出先機関である京都所司代との対立を深めていきます。なによりも自由に学問が出来ない事に日々苛立ちを募らせていきます。

ここで、桃園天皇御製の紹介。これも戦前は歴史の教科書に載っていました。有名な句です。
神代より 世世にかわらで 君(きみ)と臣(おみ)のみち すなおなる国は わがくに

(我が国は神代から代々と、君と臣との道がはっきりして、国が乱れない良き国柄である。)

この万世一系への思いと臣民への大御心は、古典・朱子学を学び皇統の正統性を強く意識しているからこそ詠まれたのではないのでしょうか。実直な性格がうかがえますね。

このように父ミカド譲りの聡明で実直な性格の天皇です。若いながらも、宮中では祭祀などを忠実にとりおこない、名君となりつつ成長していきます。

第二章：弟宮の早世と天皇位へ

このように才人であるがゆえに、摂関家と対立していた若き天皇ですが、事態は急展開を迎えます。この事件の5年後、なんと突然21歳の若さで崩御なさってしまうのです。

1762年(宝暦12年) あけの宮22歳

この早世が摂関家との対立どころの問題ではなくなってしまう。上皇も失い、皇族の後ろ盾のない御世つぎ様は、英仁(ひでひと)親王4歳、貞行(さだもち)親王2歳の御二方のみ、そしてあまりにも幼少ゆえ、様々な利害関係から、皇太后二条舎子(いえこ)と摂関家が後ろ盾となって即位させることは、はばかられました。

諸説ありますが、前出の宝暦事件の様に学問を通じ、若い公家と天皇が結託していくことに摂関家が懲りた事と、摂関家自体が代替わりでうまく機能していなかった事もあるそうです。

この急逝である崩御は八日間にわたって喪が秘密にされ、次期天皇問題が協議されます。

皇女あけの宮、姉として陰ながら支えてきた弟である天皇の崩御、父ミカドを早くに失い、そして愛する弟まで、こんなに早く失ってしまう。どれだけの悲しみが宮様にあった事でしょう。

そして摂関家は、幼い皇太子英仁(ひでひと)親王の即位までの間、姉である緋宮(あけのみや)に即位を願い、次の皇位の安定を図ります。

突然に振りかかった運命。まさか自身が天皇に即位するなど夢にも思わなかったでしょう。これも生来の気丈な性格を周りが認めていたからこそでありました。

女帝として中立で、摂関家との緩衝となり次期天皇の後ろ盾となるべく天皇という重すぎるお役目を引き受けざるを得なかったあけの宮。この皇位継承は幕府にも計られず、摂関家が緊急事態として押しきってしまいました。ついに、女帝「後桜町天皇」の誕生です。

そして、皇族の先達がない事であけの宮がどれだけ不安な日々を過ごしたことか、それは想像を絶する大変な出来事でもありました。

あけの宮は後桜町天皇として即位、この時復活していた大嘗祭などの践祚に際する儀式もほぼ男性天皇と同じように行い、甥である英仁親王への朝廷儀式の伝承に並々ならぬ努力をなされた記録が多く残っています。また、日記などによれば快活な性格を失わず、常に前向きな様子がうかがえます。そして元号は明和と改められます。

後桜町天皇は和歌に優れた天皇であり、生涯1588首もの和歌を残されています。その人となりも御製の句から伺えます。肖像画も残らず、なぞの多い人生ですが、和歌だけは歴代天皇の中でも最多クラス。そこから人物像も見えてくるようです。

後桜町天皇御製の紹介。これも戦前は皆が知っていた和歌

まもれなお 伊勢の内外(うちそと)の宮ばしら(柱) 天津日嗣(あまつひつぎ)の末永き世を

どうかお護り下さい。伊勢の内宮外宮の大神さまよ。万世一系の日本国天皇(あまつひつぎやまとのみこと)が統治する永遠の日本国を。

この伊勢神宮への祈り、皇統への思い。弟宮の天皇が崩御して、皇統の危機に直面したおもいが伝わる御製の句です。何とか平穏に甥である、「ひつぎのみこ」の世が続いてほしい。もうこれ以上、我らの不幸が続かぬようにと、祈る心に感じ入ります。

女帝という事もあり、特にまつりごとで特筆するような事件もなく。甥である皇太子英仁親王の成長を待っているかの様な平和な御政であったようです。当時の日記には甥、英仁親王の成長が数多く綴られています。少し紹介します。

明和2年10月 英仁親王、大病のため大覚寺にて平癒の修法行う。

明和3年9月 英仁親王、孔子の教えである『孝経』を読み終えたので、お祝いの儀をとりおこなう。

明和3年12月 早くも『大学』を読み始める。とても感心して喜びを日記に残す。

明和4年9月 皇太子となる立太子の儀と元服の儀が晴れてとりおこなわれ、喜びと共に伊勢・いわしみず八幡、賀茂神社に奉幣を送る。

このように、折に触れ皇太子が「するすると成長するさま」をまるで母親の様に愛おしく書きつづられています。

後桜町天皇は、生涯28冊も和歌集を残していますので、句から人となりを感じて見て下さい。少し紹介します。

なんと十二歳の時に詠んだ和歌。

きみが代の 千とせかさねてみどりなる かげを み池にうつす松がえ

題 秋の田

御代のめぐみうけて潤ふ秋の田の稲葉のつゆに民やたのしむ

題 河月

水無瀬川とほきその世の面影をへだてぬ月のすみわたるらし

題 寄道祝召

神代よりながくつたへて天地とともにたえせぬしきしま(敷島)のみち

第三章：甥、後桃園天皇への譲位と院政

1770年(明和7年) 後桜町天皇30歳

閑白の奏上があり『譲位』が決まります、そして、12歳(数え13歳)で甥、英仁親王が「後桃園天皇」として即位します。

これで9年に及ぶ女帝としての役目を無事果たした後桜町天皇は30歳、上皇陛下として甥である天皇の補佐役にまわります。しかし、女性として一番大切な時期、人生を天皇という日本一尊い地位に捧げるとは、どのようなものだったのでしょうか。もちろん生涯独身の決まりですし、いわば日本という国と結婚したようなものです。9年とはいえ想像を絶する運命でした。

もちろん、その後女性天皇はいませんし、この事を知ると女性天皇とはなんと心労の絶えないつらい職務であるかが分かります。気軽に女性がいいなんて言えませんね。

しかし、早々に不幸な出来事が起こります。後桃園天皇即位から2年後に弟宮の貞行(さだもち)親王が12歳の若さで薨去(こうきょ)なさってしまうのです。

父、弟、幼き甥と三人目。これもまた悲しむべき事件。若き甥子の早世。女帝上皇として、みなに先立たれ、どれほどつらい思いが続くのでしょうか。当時は、医学も無く、早世が多かったのですが本当に悲しい事件が続きます。

これで、ただ一人の皇位継承者となった後桃園天皇ですが、御製の句もあまり残っていません。しかし、儒学など学問をおさめ、仏教にも傾倒していたようで、泉涌寺(せんにゅうじ)などにその足跡は数多く残っています。そして、後桜町上皇も上皇の住まい仙洞御所(せんとうごしょ)で若き天皇の補佐を続けます。叔母と甥の平穏な御代が続きます。

後桃園天皇の御製の句の紹介。 迎春のことほぎ

のどかなる春を迎へて さまざまの道栄えゆく御代ぞ にぎはふ

なにか、今年の初春に聞いても素直に感動できる句ですね、皇室が続くからこそ、われわれの情緒も安定する。そんな優しさを感じました。上皇陛下にも相通じる句ですね。

第六章：後桃園天皇崩御と後桜町上皇の苦悩

1779年末(安永8年末) 後桜町上皇は39歳

何という事でしょう。病がちであった後桃園天皇が奇しくも父、桃園天皇と同じ21歳と言う若さで崩御してしまいます。(この時も急逝だったようです)

この時、後桜町上皇は39歳、22歳の即位から17年、若い時代の全てを皇統の復興に捧げてきた挙句に、二人の甥である皇子を失ってしまった嘆き悲しみは如何ほどであったのでしょうか。

日記に記してきた皇太子への愛情は本当に母の様でした。

その上、後桃園天皇には、皇女中宮維子(これこ)しか子がいません。これで父子相続としての直系子孫は、ついに絶えてしまう事となりました。

しかし、嘆いているひまはありません、後桜町上皇、再び皇室の総責任者となり次期天皇を擁立する先頭に立つ事となるのです。

第六章：四宮家からの天皇招聘

いよいよお世継ぎがいなくなったことは、この時も外部に秘匿され、次期天皇として天皇の血筋の男子を養子として迎える事が協議されます。

この当時は、伏見宮・有栖川宮・桂宮・閑院宮の四宮家体制。後見人となる後桜町上皇は前関白近衛内前(うちさき)、現関白九条尚実らと協議し二代前が天皇の弟と、比較的血が濃い閑院宮家から候補を選ぶこととします。(この経緯は諸説ありますが割愛します)

この宮家、後桜町上皇からみて、お爺さんの弟の子孫、いわゆる又従弟という関係になります。

当時、当主でない男児は全てお坊さんになると決まっていたので、協議の結果、皇女維子(これこ)との婚姻の観点から、一番年の近い六男『師仁もろひと親王』に白羽の矢が立ちます。

もろひと親王祐宮（さちのみや）はこの時8歳、聖護院（天台宗系修験宗）に出家することが2歳の時点で決まっており、出家するための勉強も聖護院で始めていました。そう、身柄はすでに聖護院預かり、宮家を継ぐのではなくお寺を継ぐ運命だったのです。

聖護院と言えば役行者直系の修験道場。坊主から天皇へ！数奇な運命とはこういう事を言うのでしょうか。ここで言う出家とは宮門跡(もんぜき)といって皇子が門跡になる事でお寺の格を高める事、一種の名誉職ですが、佛教修行は当然行います。なんとも不思議な歴史物語です。

第七章：現皇室(父子相続での)始祖『光格天皇』の誕生

閑院宮家から天皇を迎える事となった皇室ですが、後桜町上皇が引退するわけではありません。太上天皇（上皇）とは本質は天皇であり、天皇としての責務は残るのです。この時は幼少の新帝に天皇としての祭祀、仕来たりや御製などの学問を伝承するという大きな責務がありました。

後桜町天皇御製

民やすきこの日の本の国の風 なほただしかれ御代の初春

民が安らかに暮らすこの日本は（光格天皇の即位後の）はつはるに正しく発展していくことでしょう。

新帝を迎えた初春、喜びと希望に満ちた素晴らしい句です、ここでも民を思う気持ちが強く表現されています、これが大御心というものです。

僧侶から天皇へと突然の進路変更、幼少の光格天皇は後桜町上皇の言いつけを守り、とにかく学問に励みます。その後の皇族の学問への傾倒の歴史はこの時から強く意識されるようになりました。遠縁から来た天皇との引け目もあったのかもしれませんが、とにかく名君たらんとその努力を日々続けます。

そして、光格天皇が13歳になった1782年に天明の大飢饉が起こります。この数年が天皇の運命を変えていく契機となります。民を救わんとする大御心、その真心が徐々に天皇の時代を形作っていきます。

『御所千度参り』後桜町上皇の大御心と若き兼仁(光格)天皇の覚醒

1787年末(天明7年初め) 後桜町上皇47歳 光格天皇16歳

天明七年、大飢饉の最後のピークは悲惨を極め、全国各地で打ちこわし等の動乱が相次ぎます。

しかし、都の庶民だけは一種変わった行動をみせます。同年七年六月七日（1787年7月21日）より数十名が御所の築地塀の周囲をぐるぐる廻り、南門で一列する願掛け廻りを始めたのです。

そしてこの行為を見た人々はアッという間に増え、十二、三日の後には5万人とも7万人ともいう数にふくれあがっていったのでした。後にいう御所千度参りの始まりです。

この庶民の窮乏からのお参りに、心を痛めた後桜町上皇は、ここでも先頭を切って動きます。この時期に熟す小リンゴ3万個を仙洞御所(上皇の住まい)前で一人に一個配るよう命じたのです。すると、午前中で全て無くなってしまったそうです。本当にすごい数の人が集まっていたのですね。

この事を思うと、当時の庶民と皇室の関係は雲の上の存在などではなく、ある意味今より近い存在だったのではないのでしょうか。

確かに天皇の顔を見るわけではありませんが、江戸とは違い上方の庶民は、常に御所を意識していた事の証明となる事件でした。江戸時代の人々は、身分の高い人の前では頭を下げたままで、顔を見るなどとんでもなかったそうです。今でも日本人は人の顔をジロジロ見ないですものね。その名残ですね。

そして、この事件を契機に、光格天皇自ら、幕府に窮民救済を申し出ます。いくら庶民のためとはいえ、直接天皇として幕府に誓願を出すなど江戸期を通じて前例のない、まさに前代未聞の事件でした。

この誓願が通った事により幕府から救済の米が配給されます。そう、光格天皇が一本立ちする契機となったのです。

その後、仁孝天皇、孝明天皇、とつづき皆さんご存知の通り明治維新を迎えます。

後桜町上皇は73歳まで、長寿を全うし、1813年、皇太子(仁孝天皇)ら子孫繁栄をも届けてから崩御なさります。じつに維新の動乱まで50年ほど前です。明らかに仁孝天皇を通じて後桜町天皇の人となりは孝明天皇に直接伝えられているはずです。ですからそんなに大昔の方ではありません。

正に現皇室を繁栄へと導いた、国母ともいえる偉大な太上天皇陛下の数奇な運命でありました。

以上、現在、敬宮(愛子内親王殿下)をめぐる女性天皇論議がなされていますが、最後の女帝がどのような人生を送ったのか、それを知っておくことも大切な事ではないかと思い、雑文ですがご案内させて頂きました。

【紹介】後桜町天皇の陵墓は京都^{せんじゆう}泉涌寺境内の月輪陵(つきのわのみささぎ)。光格天皇・仁孝天皇の陵墓は後月輪陵(のちのつきのわのみささぎ)です。伏見稻荷の近くなので、またお訪ねください。京都市東山区泉涌寺山内町27 境内には多数の天皇ゆかりの寺や陵墓がございます。

【参考文献】

藤田覚「江戸時代の天皇」「幕末の天皇」(講談社学術文庫) 歴代天皇御製集 (WEB 国会図書館)
倉山満「国民が知らない上皇の日本史」(祥伝社新書) 小石房子「物語日本の女帝」(平凡社新書)